

琉球大学学術リポジトリ

『Hawaii Pacific Press』紙に掲載されたペルーの琉歌

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): ペルー, 移民, 琉歌, ハワイ琉歌会, 課題, ハワイパシフィックプレス キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010166

『Hawaii Pacific Press』紙に掲載されたペルーの琉歌

仲程昌徳

概要

沖縄の人々に最も好まれた表現形式になる「琉歌」は、沖縄の人々が渡った移住先の国々でも盛んに詠まれた。南米ペルーでもそうだが、ペルーの沖縄県出身者も、数多くの「琉歌」を残していた。彼らは、一体どのような「琉歌」を詠んだのか、探ってみた。

ペルーの人々の「琉歌」は、ハワイで発刊されている『ハワイ・パシフィック・プレス』に毎号掲載される「ハワイ琉歌会」の作品集の中に、数多く見られる。それは、ペルーの人々が「ハワイ琉歌会」の呼びかけに応じて、「ハワイ琉歌会」の会員になって活動したことによるが、彼らの活動期間は、1980年から1990年までの、ほぼ10年間で、そう長くはなかった。「ハワイ琉歌会」は、その期間「課題」を出していた。ペルーの会員も、当然与えられたその「課題」にそって歌を詠まざるをえなかった。それだけに、ペルーの人々は、自由にペルーのことを取り上げて歌うことはできなかったが、ペルーのことを歌った歌がみられないわけではない。

ペルーの人々が詠んだペルーと関わる歌のなかで、すぐに目につくのが「ゆす国に暮らし」「旅に身やあてん」「外国に暮らち」「余所国に居てん」といったような句である。それは彼らにとってペルーは「余所国」であり「外国」であり「旅」の地であったということを示している。そしてそれは、沖縄から海を渡っていった多くの「移民」が共通して抱いていた思いであったとっていいだろう。

「移民」の歌の一つの特色は、そのように住んでいる国を、「余所国」として捕えていた点にあるであろうが、ペルーの琉歌には、特にそれが顕著に現れていたとっていいだろう。

- I. ペルー琉歌の登場
- II. ペルー琉歌の消長
- III. ペルーの琉歌

キーワード：ペルー，移民，琉歌，ハワイ琉歌会，課題，ハワイパシフィックプレス

I. ペルー琉歌の登場

『Hawaii Pacific Press』¹⁾の「琉歌」欄に、はじめてペルー在住者の作品が現れるのは、1979年6月1日である。作者は、与座仁明。歌は、次のようなものであった。

1. 生り島ぬ市長ペルーに拝がで 肝心あわち嬉りさ福らさ²⁾
2. ゆす国ぬ暮らし思い俣ならぬ 残ていく物や皺と白髪
3. 世界に珍らさる南風ん知らん ペルーにまたいもり御待ちさびら

ペルーの琉歌は、1に見られるように「生り島ぬ市長」のペルー訪問を祝して詠まれた歌に始まる。

6月1日号の3首を皮切りに、与座はその後、『Hawaii Pacific Press』の「琉歌」欄の常連たち³⁾に混じって7月1日号に4首そして9月1日号に3首を発表。79年の与座の登場は三回だけであるが、同年12月1日号には、同じくペルー在住者の作品で、次のような歌が掲載されていた。

手紙小やでかしハワイ島行ちゆい 我身やくま居とて思むたびけじ

作者は比嘉慎一。

1979年『Hawaii Pacific Press』に見られるペルー国名になる者の登場は、与座仁明、比嘉慎一の二人だけであった。それが、翌1980年になると、一挙に増えていく。

『Hawaii Pacific Press』1980年2月号の「琉歌」欄は、1月号までの「琉歌」欄とは大きく異なるものとなっている。1月号までの「琉歌」欄は、創刊以来のいわゆる常連によって埋められていたとあっていいが、2月号には、その常連の名前のあとに、これまで見られなかった名前が数多く並んでいる。その中に「ペルー国」として又吉節子、山城千代、安和ウシ、与座仁明、仲宗根信栄、伊芸銀勇、玉城武孫といった名前が見られた。

『Hawaii Pacific Press』の「琉歌」欄が、2月号から変わるのには、1979年12月「ハワイ琉歌会」が結成され、その会員の作品が掲載されたことにある。

『Hawaii Pacific Press』1979年12月1日号は、「琉歌の作り方習う ハワイ琉歌会六日発足」の見出しで、次のように伝えていた。

琉球芸能研究家の比嘉武信氏が世話役となって琉歌研究のためのクラブを結成する準備が進められていたが、指導教師に比嘉静観師と沖縄在住の川平朝申氏が決まり、いよいよ来る12月6日(木)午後1時半からヌアヌYMCAで初会合を開き「ハワイ琉歌会」を結成することになった。

このクラブでは、琉歌の鑑賞の仕方を勉強したり、琉歌の作り方を習い、出来あがった歌は沖縄の川平朝申氏のもとへ送り、添削指導してもらうことになっている。

同クラブへの入会希望者は比嘉武信氏⁴⁾へ連絡するよう望まれている。

『Hawaii Pacific Press』の琉歌欄が、大きく変わるのには、「ハワイ琉歌会」が結成され、会員の作品を掲載するようになったことにあるが、「ハワイ琉歌会」は、ハワイ在住者だけで結成されたのではなかった。

2月号に登場したペルー在住者の作品は次のようなものである。

ペルー国 又吉節子

宝船出ざち南風に舵取らち 便ぬ数毎に想ひ乗せて

ペルー国 山城千代
旅に身や有ても肝や里おもて 歌に慰でる浮き世わたる

ペルー国 安和ウシ
外国に暮ちん生れ島沖繩の 情ある歌や肝にかかて

ペルー国 与座仁明
生れ島歌や洋やしく渡て 遠方南米に花ゆ咲かち

ペルー国 仲宗根信栄
年や流りゆい歌やまちぶゆい 繰り戻ち見欲さ元の十七

ペルー国 伊芸銀勇
ハワイてる島に琉歌の会発起ち わしたペルーまでおよび召せさ

ペルー国 玉城武孫
唄と音楽に踊るたのしみや 吹く風に揺りる花の如さ

ペルー在住者の作品が2月から多く見られるようになるのは、伊芸の歌からわかるように、琉歌会結成の呼びかけがあったことによる。「ハワイ琉歌会」の呼びかけが、ペルーだけでなく南米の国々に及んだことは、アルゼンチンやブラジル記名になる作者が見られることから明らかであるが、ペルーからの参加が、他の南米諸国に比べて断然多い⁵⁾。それは、「ハワイ琉歌会」結成前から作品を発表していた与座仁明や比嘉慎一がいたということもあろうが、呼びかけられてすぐに答えられたということは、それだけ、琉歌にたしなみのあるものがペルーには揃っていたということであろう⁶⁾。

3月号に掲載された、ペルー在住「ハワイ琉歌会」会員の歌は、次のようなものである。

ペルー 山城千代
生れ島唄や忘れていなゆみ 共に育だてゆる今日の祝い

ペルー 仲宗根信栄
目出度さや今宵歌の口開けて 心から姿若くなゆさ

ペルー 伊芸銀勇
果報の世のしるし琉歌会起ち 希望盛りあげる力なさな

ペルー 玉城武孫
今日の誇らしやや願い事叶て 栄え佳例吉のお祝さべら

ペルー 又吉節子
みろく世のしるし呼び寄しりおとぎや 育てらな互にハワイ琉歌会⁷⁾

ペルー 安和ウシ

一世や年よてん後継ゆる如に かりゆしの歌や子孫までむ

ペルー 与座仁明

琉歌てし作て松の木の如に 与所島に居てもむてい栄え

「ハワイ琉歌会」が結成されたのは1979年12月、そして1980年2月号『Hawaii Pacific Press』は会員の作品を掲載していたが、「ハワイ琉歌会」の文字が「学芸」欄に現れるのは4月1日号からである。これまで「琉歌」だけであったのが、「琉歌」と「ハワイ琉歌会」の二本立てになっていく⁸⁾。

初めて「ハワイ琉歌会」の文字が現れた4月1日号は、次のような前書きを添えて作品を掲載していた。

ハワイ琉歌会第二回作品課題「沖縄正月」応募者31人、93首。会員互選句を川平先生が添削したもの。

「ハワイ琉歌会」は、1979年12月6日の「発会式」後の「協議」で、「会員は毎月の兼題で3首を投句し、互選で投句者の一首を在沖縄の川平朝申先生に添削して頂き、新聞に掲載す」⁹⁾と決めている。4月1日号の前書きは、そのことの確認ともいえるものであるが、兼題、互選、添削といった手順を踏んで、作品は掲載されていたのである。

4月1日号は、掲載作品の後に次のような川平の「評」を付していた。

今回の作品はつぶ揃いと申しましようか、「沖縄正月」という限定された出題で、会員の皆様の懐しい思い出と郷愁が、どの歌にも溢れていて大変よいと思いました。

添削とはおこがましいことだとは思いつつ少々朱をいれた作品もありますが、果して良くなったか？は心配です。原作の方が矢張りよいのかもしれませんが。

とにかく皆さんの琉歌は中々立派な表現をしておられて敬服いたしております。出来るだけ失礼にならぬ様にと思っており、添削などとはひかえているつもりですが、気付いた点を少々手を入れて見ました。

川平が「つぶ揃い」だと評した4月1日号に掲載されたペルー組の作品は次のようなものである。

ペルー 与座仁明

南米の正月や汗はゆる暑さ 生れ島正月や冬の寒さ

ペルー 安和ウシ

童やる時や旧正月の嬉れさ 新衣ぬん着ゆい新下駄穿ち

ペルー 仲宗根信栄

門松や立てて力餅飾ぎて 寄よる年なてむ若くなゆさ

ペルー 山城千代

外国に育ち里ぬ良さ知ゆさ 沖縄正月ぬ恋しい思い

ペルー 伊芸銀勇

若水ん汲まい年や若々と 屠蘇酒の甘さ沖縄正月

II. ペルー琉歌の消長

ペルーの琉歌は、1979年6月1日号に掲載された与座仁明の三首を皮切りに、12月1日号の比嘉慎一の一首、翌1980年2月号の「ハワイ琉歌会」の結成に参加した又吉節子、山城千代、安和ウシ、仲宗根信栄、伊芸銀勇、玉城武孫らの作品、そして初めて「ハワイ琉歌会」の文字が現れた4月1日号題詠「沖縄正月」の作品まで、先に見たようなかたちで、紙面を飾っていた。

そして5月1日号の兼題「沖縄移民」では、

ペルー国 伊芸銀勇

だんじゅ嘉例吉やハワイまで渡て 新村ゆ拓けて八十の祝い

ペルー国 山城千代

渡て八十年にや枝葉までも あん美らさ栄て誇り嬉さ

ペルー国 与座仁明

夢の間の浮世八十年の祝 子孫さかてかにん嬉さ

ペルー国 安和ウシ

ハワイてる島や宝島でもの 島拓て八十年かにん豊て

といった作品が見られるが、翌6月1日号の兼題「草分け同胞賛歌」では

ペルー 伊芸銀勇

ことば知らなそてだまてうみはまて 沖縄すくゆんで友達びそりさ

ペルー 与座仁明

先輩の御蔭げ坂道も登て 御恩志情や忘すてなゆめ

といったように、二人だけになり、7月1日号も伊芸銀勇、与座仁明の二人、8月1日号では伊芸銀勇一人になってしまう。

1980年6月から8月までの紙面をみるかぎりでは、ペルーの琉歌は「ハワイ琉歌会」結成後わずか半年程で終りを迎えてしまいそうになっているが、勿論それで終わってしまったわけで

はなかった。

ペルー琉歌の消長を簡単にたどるとすれば、

一期－1979年6月～12月

二期－1980年2月～5月

三期－1980年6月～1984年8月

四期－1984年9月～1986年4月

五期－1986年5月～1990年9月

といったように五つの時期に分けることができる。

一期目は、与座仁明、比嘉慎一が登場した、ペルーの琉歌の出発期、二期目は、「ハワイ琉歌会」が結成されたことで、ペルーからの参加者が一挙に増えた時期、そして三期目は、1980年6月号から与座仁明、伊芸銀勇の二人だけになり、8月には伊芸一人だけになってペルー組の琉歌は終焉を迎えたかに思われたが、10月号になって息を吹き返していった時期である。

1980年10月1日号は、課題が「具志堅用高」。伊芸銀勇、与座仁明に安和ウシが加わるとともに、「琉歌」の欄にも又吉節子の作品が2首掲載されている。又吉の作品も「具志堅用高」を詠んだものであることからして、「ハワイ琉歌会」の欄に掲載されていて当然だといっているのだが、そうになってない。「ハワイ琉歌会」の投稿規定に反するものがあっての処置であったのだろうが、いずれにせよ、伊芸一人だけになっていた作品の発表が、10月号から、再度安和、又吉が加わって、ペルーの琉歌は盛り返し、11月から81年3月まで伊芸、与座、安和、又吉の作品が常時見られるようになる。

翌4月1日号は2月課題¹⁰⁾の「虹」を詠んだ作品を掲載しているが、ペルー組の作品は次の通りである。

ペルー 又吉節子

若夏の山に立つる虹ぬ橋 白雲になやい渡いぶさぬ

ペルー 伊芸銀勇

ハワイてる島や虹まさて美らさ ダイヤモンドヘッドくさて見事

ペルー 与座仁明

生り島沖縄ぬうじ色美らさ みやらびん美らさ情深さ

ペルー 安和ウシ

あん美らさあてん全部姿ねらん はじかさがあゆらかくち居ゆら

ペルー 平敷 春

花の色まさるぬうじ美ら色や ながみゆる心うっさふくらさ

ペルー組の常連に混じって、4月には平敷春が、初登場。4月号に続いて、5月1日号も同じ顔ぶれで、次のような歌が詠まれていた。

ペルー国 伊芸銀勇

春くりば夏と四季やかかわるとむ あきねらん年ゆ迎けて見ばさ

ペルー国 又吉節子

みどり色連りて春の節いもち 庭の草花も露どかみて

ペルー国 安和ウシ

夢に見る春や花ん咲ちふくて 綾はべるなやい止まい欲さぬ

ペルー国 与座仁明

春や花ざかり心うりしさぬ 我身ん鶯と歌い欲さぬ

ペルー国 平敷 春

のどかなる春に鶯の鳴けば 心はりばりと老いて若さん

5月号は3月課題で「春」。

ペルー組も「ハワイ琉歌会」の会員であることからして「会員は毎月の兼題で3首を投句」という会則に従わなければならないことは当然であった。4月の歌も5月の歌も、そしてこれまでの歌も「兼題」に従って詠まれていたが、翌6月号のペルー組の歌は、他の会員の歌といささか異なるものになっている。

ペルー 平敷 春

琉歌会ぬ友ゆくがとペルーまで 歌ぬ縁むしでかふうしでびる

ペルー 与座仁明

沖縄布哇ペルー太平洋ひざみ ハワイ琉歌会に友ゆ作て

ペルー 安和ウシ

夢ぬ間ぬ浮世琉歌会一年 肝心ともに誇て居ゆさ

ペルー 又吉節子

繰り返し返し昔くい言や 行ちゆる先々に句かざて

6月号の歌は4月課題の「ウリジン」である。そしてペルー組以外の会員の歌は、そのほとんどが「ウリジン」と関わって詠まれていたが、ペルー組は、誰一人として「ウリジン」と関わる歌を詠んでない。

ペルー組の歌は、又吉の歌を別にして一様に「琉歌会」と関わって詠まれている。なぜ、ペルー組の歌は「課題」に従わない歌になっているだけでなく、一様に「琉歌会」と関わる歌になってしまったのだろうか。

ペルーの6月詠歌が「琉歌会」と関わる歌になったのは、全く根拠がなかったわけではない。1981年6月1日号『Hawaii Pacific Press』は、「ハワイ琉歌会一周年」の見出しで、次のような記事を出していた。

ハワイ琉歌会（比嘉武信代表幹事）は、近く創立一周年記念『琉歌集』を発行する。すでに原稿は出来上がり、ハワイ報知でタイプ・セットに移され、7月中には印刷出版の見通しである。

比嘉武信氏によると同琉歌集の内容は、ハワイ琉歌会メンバーが作った琉歌約250首と創立一周年を迎えての感慨などを綴った随筆を多数。（中略）

ハワイでこのような琉歌集が発行されるのは、81年の移民史の中でも初めてのこと。また、故郷沖縄でも新作琉歌集の発行は、きわめて例が少ないことだといわれる。（中略）

ハワイ琉歌会は、1979年12月に創立され、昨年12月に一周年を迎えた。会員は26人。

記事はその後に「寄付、祝賀広告を勧誘中。現在次のような協力がある由」として、金額と氏名を発表しているが、そこに伊芸銀勇、又吉節子、安和ウシ、与座仁明の名前がみられる。

ペルー組が、6月1日号の記事に見られる「創立一周年記念『琉歌集』」の刊行に積極的であったのは、「寄付」にも現れていた。

ペルー組の6月詠歌が「課題」の「うりずん」ではなく、「琉歌会」と関わる歌になったのは、「琉歌会」とのかかわりを喜ぶ気持ちを強く打ち出したいとの現われに他ならないが、あと一つには、次のような問題があった。

毎月課題を下さって勉強しておりますが、今月課題の「ウリズン」という言葉の意味がよく解りません。沖縄グラフの1980年8月号の11ページに勝連村の「町・昇格記念記事」がありますが、その中に「うりずん（若夏）」と書かれていますけど、ウリズンとは若夏のことでしょうか。そういうわけで今月（4月）は雑詠にしましたので悪しからずご了承下さい。

又吉節子の「手探りの"琉歌"」と題した随想の中に見える一文である¹¹⁾。

4月課題の「うりずん」が、むずかしい課題であることは、課題を選定するときすでにわかっている、「4月課題は「ウリズン」むずかしいので雑詠もOK¹²⁾」とある通りである。

ペルー組は、又吉と同じく「ウリズン」で詠むことを断念し、「雑詠もOK」を「琉歌会」に読み替えて「ハワイ琉歌会」を祝福する歌にしたのである。それは、ペルー組だけの「課題」で歌を詠んだことをそれとなく示すものであったが、その他に、「ハワイ琉歌会」の「課題」とは異なる、ペルー組だけの「課題」になる歌は見当たらない。

ペルー組の詠歌は、1981年4月から伊芸、又吉、安和、与座、平敷の歌が常時見られるようになり、それが1982年2月号まで続く。

1982年2月号に見られるペルー組の歌は次の通りである¹³⁾。

ペルー国 与座仁明

夢ぬ間ぬ浮世七十坂上て 心やしやしと琉歌ゆ習て

ペルー国 又吉節子

渡海や隔みてん旅宿ぬ思い 夢ぬ馬鹿者や沖縄通て

ペルー国 安和ウシ
心楽しみに夢ゆ見る時や 百万長者になとる如さ

ペルー国 平敷 春
余所国に居てん心福々と 夢に現わりる親ぬ姿

ペルー国 伊芸銀勇
ハレアカラ登てハワイ島眺み 語らたる親友達夢ん美らさ

2月号の課題は「夢」。楽しい「夢」を見たときは「百万長者」になった気分であると、歌った安和は、翌3月号から名前が見えなくなる。「ハワイ琉歌会」に掲載された最後の歌であった。

安和の歌が見えなくなった後のペルーの琉歌は、与座、伊芸、又吉、平敷の四名だけになり、その中から時に二人欠けたりして寂しいものになるが、1983年6月号までは、次のように四名が顔を揃えていた。

ペルー国 与座仁明
山ぬ端にかかる十五夜ぬ御月 幾年ゆなてん肝に残て

ペルー国 平敷 春
高山ひく山美ら山やな山 御万人ぬ姿似ちよる如さ

ペルー国 又吉節子
アンデスぬ山や幾巖ん有むぬ 朝夕眺みとて心和ぐで

ペルー国 伊芸銀勇
山々やあまた名やまさて居てん エベレスト山や山ぬ王者

4月課題の「山」にちなんで歌われた歌が掲載された同日の「文芸」欄は、「琉球新報で賞賛されたハワイ琉歌会」の見出しで、次のような記事を掲載していた。

沖縄の日刊紙琉球新報の5月9日付コラム「金口木舌」で、ハワイの琉歌が賞賛されている。次はその全文。

飲みば心配事んちゅらしゃ打ち忘れて誠泡盛や玉ぬ箒——。ホノルル市に住む比嘉良信さんが詠んだ琉歌だ。「ちゅらしゃ打ち忘れて」という表現がなかなかいい。美酒の飲み方を心得たご仁のようだ。

ペルーの又吉節子さんがひねった琉歌は「沖縄生りたる泡盛ぬ酒や廻る盃ぬ底んねらん」きつとご主人は「底んねらん」ぐらいの豪の者でござろう。二つの作品とも飲みっぷりのよさがうかがい知れて、ウチナーンチュの心意気が伝わってくるようだ。海外の県人社会は、どこでも琉歌が盛んだ。ハワイ琉歌会は月例会を開いて作品を持ち寄っているし、南米では県人会の集まりで“即興歌人”が飛び出して一句ひねる習わし。今年のアルゼンチ

ンうるま老人クラブの新年会では、幹事の与儀キクさんが「うるまとしゅいやいちまでいんわかく 年や重にてん 春季節の心」と詠んだ。

本場の沖縄で琉歌がすたれ、海外の県人社会で脈々と受け継がれているのは、いかにも皮肉。琉歌の古里は外国に移ってしまったようで寂しい。

異国にいて古里への愛着がそれだけ強い、ということだろうが、私たちも負けずに沖縄のよさを継承したいものだ。その刺激にでもなればと、本紙では毎週月曜日夕刊の「海外ウチナー事情」欄で移住地の人たちの作品を紹介している。たまには老人会の集まりで、泡盛でもくみかわしながら、「心配事んちゅらしゃ打ち忘れて」琉歌を作ったら素晴らしいと思う。ウチナーグチには共通語とはひと味違う語句も多い。琉歌をひねって大いに芸術的気分にひたろう。

「金口木舌」は、海外では県人会などの集まりで、興に乗って琉歌が飛び出してくるほどに、琉歌が盛んに歌われるだけでなく、ハワイには琉歌の会もあって毎月定例会があるといった、海外における琉歌の現状を報告するかたちをとって、本場沖縄での琉歌の凋落振りを嘆いたものとなっているが、「ハワイ琉歌会」の毎月の琉歌詠歌数を知れば、「金口木舌」の筆者ならずとも、同じ思いを抱いたにちがいない。

海外の、とりわけ「ハワイ琉歌会」の活動には、確かに眼を瞠らすものがあるが、しかし、そこにも少しずつ変化が起こっていた。

1983年6月号までは、四名が顔を揃えていたペルー組も、翌7月号から平敷春の歌が見られなくなって、与座、伊芸、又吉の三名になってしまう。

安和に続いて平敷の退場は、ペルーの琉歌を寂しいものにしたとあっていいが、1983年10月号には新しい詠み手が登場する。同月の「課題」は「世間」。ペルー組の作品は、次のようなものであった。

ペルー国 久高将光

誠真実や世間ぬ宝 年や寄て居てん肝にとみて

ペルー国 又吉節子

世間音高さ真珠湾の港 弾ぬ傷跡やなまに残て

ペルー国 与座仁明

我が生り沖縄わが暮らしペルー 世間御万人と世和（平和？）願ら

ペルー国 伊芸銀勇

世間無んありば闇ぬ夜ぬ心 互に肝合わち尽ちいかな

久高の登場は、外国における琉歌人口が一方的に減っていくわけでないことを示すものであった。三名だけになっていささか寂しくなっていたペルー組を喜ばせたに違いないが、それはペルー組だけの光明というだけではなかったに違いない。

1984年「ハワイ琉歌会」は五年目を迎える。

1984年1月号『Hawaii Pacific Press』は、「五周年企画を発表 琉歌会が忘年会を開く」の見出しで、次のような記事を出していた。

ハワイ琉歌会は、12月12日午前11時から北クアキニ街の川上善子夫人宅で忘年会を開き、一年のしめくくりを行った。

席上主宰の比嘉武信氏から「来年は創立五周年に当たるので、記念誌を発行する。また添削指導に当たっている沖縄在の川平朝申師をハワイに招いて恩を返したい」との発表があった。

すでに、川平師へは招待状を送り、夏に来てほしいとの要望をそえたが、まだ返事はないという。

一方、記念誌の方は、書記の比嘉良信氏が中心になって準備を進めている。

「ハワイ琉歌会」は、1981年9月『琉歌集 ハワイ琉歌会創立一周年記念』を出していた。その「編集後記」で、比嘉武信は「禍福は糾える縄の如く、また、禍福は門なし唯人の招く所……という。この琉歌集は意外にも難産でした。帝王切開とまでは至らなかったが月余いん子で、編集子は苦勞させられた。／今年の忘年会で歌集の発行を決議し、本年3月発行を目途に努力したが、2月に入って、某編集委員よりストップがかけられ、臨時総会を開くような道草を喰ってしまった。／趣旨には賛成だが実行には反対……という奇怪な理論があることを体験させられた。その余波を正面にかぶって、古参の三詩友が「和のない所は住みにくい」として、離会休会したのは痛恨でした。結局は会員の総意によって発刊することにはなった。が、割り切れない痼が未だに燻っている」と書いていて、随分と苦勞したことが伺えるが、その苦勞を忘れたかのように、また記念誌の刊行の準備を進めているというのである。

五周年記念誌の発行は、一周年記念誌の発行に比べれば、比較的楽であったに違いない。それは、一周年記念誌というモデルがあったことでもそうだが、それ以上に作品の数が、一周年記念誌のときとは比べ物にならないほど多かったということがある。さらには、五年に及ぶ会の活動が、会員の結束を強いものにしていたはずである。

1983年12月12日、「来年は創立五周年に当たるので、記念誌を発行する」と発表された記念誌は、1985年7月になって刊行される。武信は「編集後記」で「1981年の創立一周年記念『琉歌集』は、出版まで紆余曲折をへて難産だったが、今度の五周年記念『同人集』は400頁、一万数千ドルの出費にもかかわらず、始めより終りまで順風満帆であった」と書いていた。そこには、会の結束の強さが、それとなく語られていて、「ハワイ琉歌会」は、まさしく「順風満帆」であったことがうかがえるが、ペルーの琉歌は、1984年8月を最後に、また一人、大きな存在を失う。

ペルー 又吉節子

父親ぬ遺徳隅々ん照らち 玉や砕きてん光残て (父)

ペルー 伊芸銀勇

名に立ちゆる火山キラウエアやしが マウナロア連りて噴火見事

ペルー 与座仁明

神仏やてん頼る事ならん 天災ぬ火山平和みだち

8月号は6月課題の「火山」を詠んだ歌が掲載されていた。ペルー組も、伊芸と与座は「課題」に従った歌を詠んでいたが、又吉は、歌の後ろに付してあるように「父」を詠んでいた。又吉の8月掲載歌が「父」を詠んだものになったのは全く理由がなかったわけではない。前月7月号に掲載された又吉の歌とそれは関わりがあったと考えられるからである。又吉の7月号掲載歌は次のようなものである。

母と故郷やいちん想まさて 童から今に手綱なゆさ

7月号掲載歌は、5月課題の「母」で、又吉は「課題」に従って詠んでいた。又吉は、5月課題の「母」を詠んだとき、「父」についても詠んでいて、それを8月号への投稿歌としたのではなかろうか。「ペルー 又吉節子」の登場は、「父」を詠んだ歌の掲載で幕を下ろす¹⁴⁾。

ペルー琉歌の四期目は、ペルー琉歌の大きな担い手の一人であった又吉が退場した後の時期で、与座、伊芸の二人に時に久高が加わるかたちで1986年4月1日まで続く。

ペルー 与座仁明

時世ぬ流りや琉歌ぬ課題まで 外国ぬ言葉頭病まち

ペルー 久高将光

真盛いぬ二十南米に渡て バレンタインでしや今ど知ゆる

ペルー 伊芸銀勇

青春や良たさ恋人と連りて バレンタイン選らで千代ぬ契り

1986年4月の掲載歌は、2月課題の「バレンタイン」。久高は、南米に来て、初めて知った祝日を詠んだ歌を最後に、琉歌欄から姿を消す。

1986年5月以降、ペルーの琉歌は与座と伊芸の二人だけになって、五期目を迎える。与座仁明の生年が、1904（明治37）年12月22日、伊芸銀勇は1908（明治41）年10月11日、与座は、すでに80歳を越え、伊芸もやがて80歳を迎えようとしていた¹⁵⁾。

1990年「ハワイ琉歌会」は、「創立十周年記念誌」『微風』を刊行する¹⁶⁾。記念誌の編集にあたった比嘉良信は次のような随想を同誌に寄せていた¹⁷⁾。

今私が一番気になるのは、新入会員が少なく琉歌会の前途に不安を感じ、我々の時代だけで終わりたくない、終わらせたくないと言うことである。若い人の入会者がなければ、尻切れトンボになり永続きしない。

沖縄語は特別むつかしい。今までに色々と工夫をこらして来たけれど、何れも適格な方法が無い。実に悲しむべき現象です。要するに琉歌会をより以上に盛んにすること、その

為には琉歌に精進し、音曲に乗せ、若い世代を引き付ける事以外に方法はないと思う。其の点お互に充分気を付けて琉歌の永久存続を考えなければならない。

「ハワイ琉歌会」が、「新入会員が少なく琉歌会の前途に不安を感じ」「若い世代を引き付けたいと「色々と工夫をこらして来た」のは、次のような理由があった。

一周年記念発刊当時の会員は29名で、94歳から49歳まで、平均年齢は69歳半であった。4年後の現在は、会員23名で87歳より47歳まで、合計1650歳、平均年齢は71.7歳。4年間に2歳の加齢だから若返った、と言える。これから戦後一世が入会すれば、もっと若返る可能性がある。

創立満五周年記念誌の「編集後記」に記されている文章である。同誌が刊行されたのは1985年、創立十周年記念誌が刊行されたのが1990年。1990年の会員の平均年齢が五年前の平均年齢より下ることはなかったはずで、そのことを思えば、比嘉良信の思いの切実さがよくわかるはずである。

そのことをより切実に感じていたのが他ならぬペルー組であったであろう。1986年5月以降、二人だけになっていたペルー組は、「創立十周年記念誌」が刊行された1990年の9月号を最後に姿を消す。

ペルー 与座仁明

文化世になやい命ん恵まりて 七、八十なてん二十心

ペルー 伊芸銀勇

世界ぬ目ゆ引ちやる日系大統領てし どん底のペルーゆ救くて呉ゆら

9月号課題は、7月「雑詠」。長命を喜ぶ歌と、絶望的な国の状態を憂える歌と、まったく異なる歌が詠まれているが、これが、ペルー組琉歌の最後を飾った歌であった。

III. ペルーの琉歌

1979年6月号付『Hawaii Pacific Press』に掲載された与座仁明の3首に始まったペルーの琉歌は、1989年12月には比嘉慎一、そして同月6日「ハワイ琉歌会」の発足とともに又吉節子、山城千代、安和ウシ、与座仁明、仲宗根信栄、伊芸銀勇、玉城武孫が加入して、「会」の一翼を担い、1983年の半ばまで琉歌壇を賑わせたといっているが、1986年半ばから与座と伊芸の二人だけになり、1990年9月号を最後に「ハワイ琉歌会」の欄から姿を消す。

『Hawaii Pacific Press』に見られるペルーの琉歌は、その出発から終焉までほぼ十年間しかなかった。その活動期間は、決して長かったとはいえないが、彼らは、その間、どれだけの歌を詠み、何を歌ったのだろうか。

1979年6月、与座仁明の3首に始まり、1990年9月与座仁明、伊芸銀勇の各一首の発表で終わったペルーの琉歌は重複含めて380首。十年間に詠まれた作品で数多く見られるものといえば、

次のようなものになるであろう。

ハワイてる島に琉歌の会発起ちわしたペルーまでおよび召せさ（伊芸銀勇）

みろく世のしるし呼び寄しりおとぎや 育てらな互にハワイ琉歌会（又吉節子）

沖縄布哇ペルー太平洋ひざみ ハワイ琉歌会に友ゆ作て（与座仁明）

ハワイ琉歌会やチャックワゴン居とて五周年ゆ祝わて沙汰ゆ残す（伊芸銀勇）

果報ぬ辰年に琉歌会ぬ十年 互に肝合わち老て若さん（与座仁明）

ハワイ琉歌会ぬ志情ぬテープ 聞きば聞く程に情湧ちゆさ（伊芸銀勇）

ペルーの琉歌に、右のような「ハワイ琉歌会」を詠んだ歌が数多く見られるのは、他でもなく、ペルーの琉歌詠者が、「ハワイ琉歌会」に属したことによる。「ハワイ琉歌会」結成にあたって、ペルーにも呼びかけがあったことは、伊芸の歌からわかるが、伊芸はさらに、次のような手紙を「琉歌会」宛に送っていた¹⁸⁾。

今回、ハワイの皆さんが沖縄の文学的高度の価値ある琉歌の宣揚と普及の為、同好の方が集まり研鑽されますと共に、南米ペルーに居る私達までお招待下さって有難く思います。ペルーはまだまだ琉歌の緒口で、これから研究して行かねば他国のそれに追付けません。ペルー新報に「ハワイ琉歌会誕生」の記事を掲載し、同好の方に応募するよう要請しました。何分よろしく御配慮賜りとうございます。

伊芸は、「ハワイ琉歌会」からの「招待」に感謝の意を表するとともに、すぐにそのことを、当地で刊行されている「ペルー新報」に紹介、「同好の方に応募するよう要請」していた。伊芸の呼びかけは、さっそく効果をあらわす。

ペルー新報に伊芸銀勇氏が「琉歌を作り貴兄宛に送るよう」の記事がありましたので、下手な横好きで5首を送ります。

浅学文盲の老人ではありますが、時々雑詠や琉歌を当地の邦字新聞にも出して居ります。琉歌を通じ余生を楽しく暮らす積りで居ります。

与座仁明が、「琉歌会」宛に送った手紙である¹⁹⁾。与座は、「ハワイ琉歌会」結成以前から『Hawaii Pacific Press』に琉歌を発表していたことからして、伊芸の「要請」にすぐに応じられたといいが、その「要請」に応じたのは与座だけでなかったのは、くり返し見てきた通りである。

ペルーの琉歌に、「ハワイ琉歌会」を歌った歌が多くみられるのは、そのように、ペルー組が、「ハワイ琉歌会」の一員であったことによるが、ペルー組はまた、次のような歌を詠んでいた。

だんじゅ嘉例吉やハワイまで渡て新村ゆ拓けて八十の祝い（伊芸銀勇）

ハワイてる島や虹まさて美らさ ダイヤモンドヘッドくさて見事（伊芸銀勇）

パシフィック海に浮かぶハワイ島 名に立ちゆるフラやお客招ち（又吉節子）

名に立ちゆるキラウエアやしが マウナロア連りて噴火見事（伊芸銀勇）

ハワイ県人の希望うちかなて 見事さみ会館流石ハワイ（伊芸銀勇）

ペルー組は、ハワイ沖縄県人会の行事、人の往来そしてハワイの風物といったのも詠んでいた。それだけに、ハワイと関わる詠歌が目立つのである。

ハワイと関わる歌に次いで多く見られるのは、次のようなものである。

外国に育ち里ぬ良さ知ゆさ 沖縄正月ぬ恋しい思い（山城千代）

弁当や芋練い高ちぶい絡ぎ ハリー見いがぬ姿肝に残て（与座仁明）

外国に居てん四日ぬ日になりば 生り島ぬ爬竜や夢に見ゆさ（平敷 春）

渡海や隔みてん旅宿ぬ想い 夢ぬ馬鹿者や沖縄通ゆて（又吉節子）

生り島沖縄覚び出すさ昔 新北風ぬ頃ぬ肝に残て（久高将光）

新北風吹く頃に友連りて行かな 鷹ぬ群ちゆくて渡る見欲しや（伊芸銀勇）

妖怪日になりば崎山ぬ御茶屋 敷名高坂ぬ火玉待ちゆさ（与座仁明）

ペルーにいて、故郷沖縄のことが、心をよぎる。これらの歌は、そのことがよくわかるものとなっている。そしてそのことは、彼らが、沖縄で生まれ育ったことを示していると同時に、ペルーの琉歌が、どの世代によって担われていたかをよく示してもいた。

ペルーの琉歌を詠んでいてすぐに気づくことがある。その一つが「ゆす国に暮らし」「旅に身や有てん」「外国に暮らち」「万里ひじゃみとる」「余所国に居てん」「移民なて渡て」「地球ぬ裏居てん」といった句の多く見られることである。これらの句には、ペルーに移住した人々の意識がよく表れていたとっていいだろう。

彼らにとってペルーは「余所国」であり「外国」であり「旅」の地であった。ペルーは、いわば仮の国であるといった意識が強かった。そのような「余所国」「外国」「旅」の地であるペルー、すなわち「生れ国」から「移民」してきた国ペルーを、彼らは、どのように歌っていたのだろうか。

アンデスぬ山や幾襲ん有むぬ 朝夕眺みとて心和ぐで (又吉節子)

ペルーぬ夏休み正月に初み 御万人と共に祝て遊ば (与座仁明)

南米ぬインフレ軒並に高さ いちやがなていちゆら心配や続ち (伊芸銀勇)

宝国ペルーん思い自由ならん 賄賂国習慣ながくちゞち (与座仁明)

世界ぬ目ゆ引ちやる日系大統領てし どん底のペルーゆ救て呉ゆら (伊芸銀勇)

ペルー組のペルーを歌った歌には二種ある。その一つが上にあげたような歌で、あとの一つは次のようなものである。

南米の正月や汗はゆる暑さ 生れ島正月や冬の寒さ (与座仁明)

雨暴風ん知らんペルー国に居りば 南風と新北風ぬ節ん忘して (与座仁明)

これらの型の歌は、故郷と関わって詠まれているという点では先に見た沖縄を偲んで歌った歌と良く似ているが、単に沖縄のことが思い出されたのではなく、ペルーが沖縄と異なる点を強調するかたちで歌われていた。

ペルーを歌った歌は、両者合せてもそれほど多いとはいえない。ペルーに住んでいて、ペルーを対象にした歌をそれほど詠んでないのは、「ハワイ琉歌会」に属していたことと関係しているよう。

ペルーの琉歌を詠んでいて、すぐに気づく後の一つは「わした年寄や」「年や取て居ても」「七八十なりば」「九十坂登て」「皺白髪やてん」「老人なてからや」「歳や重にてん」といった句が数多く見られることである。それは、ペルーの歌の詠み手たちの年齢の高さをよく示すものであったとっていいだろう。

歌は、歳を次のように詠みこんでいた。

門松や立てて力餅飾ぎて 寄よる年なてむ若くなゆさ (仲宗根信栄)

年終りなても嘉利吉ぬしるし 年や取て居ても生命お願げ (安和ウシ)

子や孫ちりて九十坂登て 花ぬ風車ん拝で見ぶしや (又吉節子)

年若さ中や汗水ゆ流ち 老人なてからや隠居暮し (久高将光)

年や夢ぬ間に八十坂近さ 御老人になたる覚びんねらん (伊芸銀勇)

文化世になやい命ん恵まりて 七、八十なてん二十心 (与座仁明)

ペルー組の歌は、そのように老いと関わって詠まれた歌が数多く見られる。ペルーの琉歌は、老いを歌った歌、ハワイと関わって詠まれた歌、故郷をしのぶ歌そしてペルーを歌った歌といっ

たように、大きく区分できるが、歌われていて当然だと思われる歌が、不思議と見当たらない。

ペルー組の歌には「移民」が何をして暮らしたか、その暮らしぶりを詠んだ歌がみられない。「ゆす国ぬ暮らし思い俣ならぬ 残っていく物や皺と白髪（与座仁明）」「ことば知らなそてだまてうみはまて 沖縄すくゆんで友達びそりさ（伊芸銀勇）」「移民なて渡て錦飾ゆんで エプリルフルや有てん知らん（与座仁明）」「真盛いぬ二十南米に渡て バレンタインでしや今ど知ゆる（久高将光）」「新移民時や言葉から仕事 思いままならん朝夕苦勞し（与座仁明）」といった歌から彼らが頑張ったことを知ることは出来るが、彼らが何をしていたかを知ることはできない。

「ハワイ琉歌会」に所属したことで、彼らは、それぞれに数多くの歌を残した。しかし「ハワイ琉歌会」に属したことで、彼らは「課題」に縛られた。彼らが「課題」とよく格闘したことは与座仁明の「ピクニック課題や歌に乘し苦りさ 古頭なやい詠みんならん」や「時世ぬ流りや琉歌ぬ課題まで 外国ぬ言葉頭病まち」といった歌によく現れている。そしてその「課題」に心を奪われたことで、詠み残したのがあったのである。「朝夕苦勞」した仕事の歌がないのは、それを歌にすることが困難であったという事情もあるであろうが、「課題」と無関係ではなかったはずである。

注

- 1) 『Hawaii Pacific Press』が、創刊されたのは、1977年12月30日。「琉歌」の掲載は、創刊号から見られる。
- 2) 「浦添市長ペルー訪問」の詞書が見られる。
- 3) 創刊号は比嘉良信、与儀喜厚、川上善子、知念房、呉屋真莉の「琉歌」を掲載、以後比嘉良信、与儀喜厚を中心に比嘉盛勇らが加わって「琉歌」欄が維持されていく。
- 4) 氏名の後に、電話番号が記されているが、省略した。
- 5) 1980年2月号に「亜国 比嘉盛吉」、3月号に「アルゼンチン 比嘉盛善」の作品が掲載されているが、アルゼンチンからの参加はその二回だけ、そして4月号に「ブラジル 和宇慶朝幸」、5月号に「ブラジル 山内盛統」の作品が掲載される。6月号には両者の作品が見られるが、7、8月号は山内盛統の作品だけで、その後は見られなくなり、1985年になって山内の作品が3月号、4月号に見られる。アルゼンチン、ブラジルにも、呼びかけていたことがそれでわかるが、長く続かなかった。
- 6) 1977年10月31日に締め切られた「海外の琉球芸能を讃える歌」当選作品62首のうち19首がペルーの人たちの作品であったことからわかるとおり、ペルーには、琉歌を詠む人たちが他の南米諸国に比べて多くいた。比嘉武信編著『ハワイ琉球芸能誌 ハワイ沖縄人78年の足跡』（1978年12月15日、ハワイ報知社）「募集琉歌当選作品」の項参照。
- 7) 「おとぎやは兄弟姉妹」の「註」が見られる。
- 8) 創刊とともに「文芸」欄に設けられた「琉歌」の欄は、「課題」にとらわれずに詠まれた歌が掲載された。
- 9) 『琉歌集 ハワイ琉歌会創立一周年記念』（1981年9月吉日発行、発行者ハワイ琉歌会、責任者比嘉武信、印刷所ハワイ報知社）所収「書記録は語る」1979年12月6日の項参照。

- 10) 新聞掲載時の作品は、2カ月前の「課題」。2月課題は4月号に掲載された。
- 11) 「手探りの“琉歌”」『琉歌集 ハワイ琉歌会創立一周年記念』所収。
- 12) 「書記録は語る」(1981年) 2月12日の項参照。その後に「今後は新人勧誘のため課題と雑詠を併用する」とあるのが見られる。「雑詠」も可としたのは、「課題」が難しいといった言葉が少なからずあったことをうかがわせる。
- 13) 同日号の「琉歌」欄には、与座仁明の作品「酉年んしまて向かて戌年や かりゆしぬ果報とも (に) 拝ま」「年や重にてん毎年の正月 斗搔風車ん願て暮らさ」の2首が掲載されている。
- 14) 1987年2月号に又吉は「惜む沖縄語や亡び前ぬ艶姿 せめて伝えたや此ぬ詩集にて」を発表しているが、国名が「ペルー」ではなく「アルゼンチン」になっている。
「拝啓・ハワイ琉歌会殿 伊芸銀勇氏より」(『祝日本人官約移民百年祭 ハワイ琉歌会同人集 創立満五周年記念誌』所収)の1984年10月12日日付になる書簡に「又吉節子さんは、ペルーの商店住宅を売って、アルゼンチンへ転住されました」というのが見られる。
- 15) 両者の生年月日は『祝 日本人官約移民百年祭 ハワイ琉歌会同人集 創立満五周年記念誌』を参照。
- 16) 1990年吉日発行，編者比嘉良信，発行ハワイ琉歌会，印刷製版ハワイ報知社。同誌の表紙には「祝沖縄移民入植90年祭」の文字が見られる。
- 17) 「和の美しさ」『ハワイ琉歌会創立十周年記念誌 微風』所収，参照。
- 18) 「琉歌会に届いた御状」『琉歌集 ハワイ琉歌会創立一周年記念』所収参照。1979年12月21日の日付けが見られる。
- 19) 「会員からの言葉集」『琉歌集 ハワイ琉歌会創立一周年記念』所収参照。1980年2月28日の日付けが見られる。

* 本稿は、第10回WUB世界大会ペルー2006「カンフェレンス『沖縄移民』」(2006. 1. 30. リマ，スイス，ホテル) で使用した原稿である

(なかほど まさのり・琉球大学法文学部教授・沖縄文学)